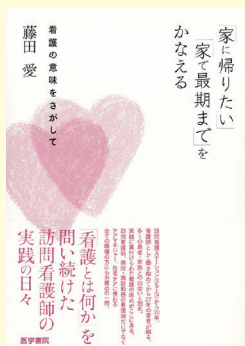


(書評者)
看護師
宮子あずさ

『「家に帰りたい」
「家で最期まで」を
かなえる
看護の意味をさがして』

藤田 愛＝著

2019年発行
本体2300円＋税 医学書院



訪問看護(師)が苦手な人にこそ読んでほしい

私が精神科病院の訪問看護室に勤めて 10 年になります。私の場合、訪問看護の世界に來たのは全くの偶然でした。

当時私は大学院生をしながら要介護になった実母の世話をしていました。そのため週に 3 日勤務の条件で、自宅から近い精神科病院に求職したのです。所属の希望を言わなかったところ、「精神科の経験があるなら、ぜひ」と、訪問看護室に配属されました。

●訪問看護は出家、病棟看護は在家？

それまで私は 22 年間、500 床程度の総合病院で働いてきました。内科、精神科、緩和ケア病棟と、ずっと病棟勤務。就職した昭和の終わりにには訪問看護はまだ珍しく、「意識の高い人が希望してやる仕事」、そんな印象をもっていました。

病院勤務をしていても訪問看護で働く看護師とかかわりはあったのですが……正直言って、どこまでも深く患者さんとかかわろうとする訪問看護師と、病棟で働く私たちとは、しばしば熱量の違いを感じ、戸惑うこともありました。

「訪問看護は出家信者。病棟看護は在家信者。信心の度合いが違うのよ」。もろもろ嘆く私に、病棟の同僚がこう言いました。この言葉に納得して気が済んだ記憶が残っています。

そんな私が今訪問看護の職場にいるのは、患者との関係を密にしすぎない看護を行う、比較的薄味の訪問看護室だからでしょう。あえて行く人を固定せずいろんな看護師が訪問する。これが私の職場のやり方です。距離が近くなると妄想的になる人も出てくる精神科の訪問看護。これはじつに妥当なやり方だと感じます。

●人間のありのままをとらえる視線

このような前置きで、訪問看護に邁進する藤田さんの本をご紹介しますのはいささか申し訳ない気もします。しかし、訪問看護に従事していても在家信者を抜けきれない自分が読んでも感銘を受けたからこそ、あえて上記をカミングアウトしたうえでお勧めしたいと考えました。

もともと Facebook の投稿を元にまとめたというこの本には、藤田さんの強い感情がそのまま封じ込められた文章がたくさんあります。1 つ 1 つに、藤田さんが描き出されていると言ってもいいでしょう。なかでも私が強くそう感じた一文を、2 つご紹介したいと思います。

「家が病院搬送か——家族の意見の対立の中で——長く

患う高齢女性をめくって、最期まで家で看たい夫と、最期まで救命してほしい次男。ここではその対立が描かれています。最終的にはこの方は病院で亡くなり、藤田さん自身の目標も叶いませんでした。この結果について藤田さんは「最期まで救命・延命治療を受けさせたい家族もいるのだ。……私たちは、それでも与えられた状況のなかで最善を尽くすのが責務である」と書いています。

自身の理想は理想として大事にしながらも、それと相反する次男の気持ちもまた、やむを得なかったと受け入れる。熱意と共に柔軟さを併せ持つ、藤田さんならではの看護だと思いました。

「夫の終わりに万歳」——大正中期生まれの高齢の夫と妻。ずっと夫に従ってきたであろう妻が、献身的に夫に尽くしてきましたが、いよいよ夫が息を引き取ると、「満面の笑みを浮かべて万歳を 2 回もした」。これを見た藤田さんは、「看護師としてのよろめくような衝撃」を受け、「必死で終末期の看護を計画し、実施していた自分が笑える」と振り返っています。

こうした衝撃は私も記憶にあって、やはり大正中期頃に生まれたご夫婦。ずっと夫に連れ添った妻は、夫が亡くなった瞬間に葬儀モードに切り替わり、「通夜の寿司は竹よ！」と自宅に電話して絶叫したのでした。

藤田さんと私に共通するのは、一見不謹慎な場面のなかに、人間のありのままの姿を見ていることです。善悪の裁きを越えて、驚きと共に受け入れる。それが臨床の醍醐味にほかなりません。

●あなたにはどの文章が響きますか？

藤田さんの文章は、熱く語りながら押しつけがましくなく、安心して読めるヒューマンな文章です。訪問看護に関心がある人もない人も、これから自分の仕事にしたい人もそうでない人も、それぞれに自分の看護を考えるきっかけになるでしょう。

管理者として、訪問看護師として、いわばプレイング・マネージャーの役割をとっている藤田さんの考えを知るの、管理者としてのあり方を考えるきっかけにもなると思います。

ぜひ本を手に取り、気になる項目から読み進めてください。どの文章が心に響くかに、読み手の関心が強く映り込むでしょう。訪問看護を知りたい人、接近戦の看護をしたい人にはお勧めの 1 冊です。

精